

清朝中期史研究

鈴木 中正 著

昭和二十七年一月 豊橋愛知大學國際問題研究所

學術叢書一 A 5 判 二二五頁 三〇〇圓

◇本書は愛知大學文學部鈴木助教の十年來苦心の研究精華である。本書は嘉慶朝における白蓮教徒の大叛亂の研究を中核に清代中期（一六八一—一七九五）の社會・政治史に關する考察を展開したもので、この種の著作が比較的乏しい今日、研究者必見の文献となるであらう。とくに、教團およびその叛亂について、ほう大な内外の資料を驅使して——著者が指摘するようにそれが官憲および反白蓮教の立場にある外人宣教師の側よりの一方的文獻に限られるにしても——綿密に記述されたことは、學界に對する非常に大きな寄與といふべきである。

◇しかも著者は傾聴さるべき多くの特色ある見解をそこに示しているが、その中、筆者として特に興味をおぼえた諸點を次に列記してみると、

①この教亂は清朝中期に醸成された社會崩壞過程の最初の集中的表現であるが、②それが嘉慶初年なる時に四川・湖北・陝西三省交界の山地という處に發生したのは右の意味で特殊な必然的歴史的理由が存するもので、大規模な叛亂が何時何處に拘らず常に發生可能

であるとするいわゞ超歴史の見解に反對する。③しかしこの亂は革命的あるいは農民暴動的性格を欠いた反社會的騷亂に止まつたとして、佐野學氏などの農民暴動説を斥ける。④教徒の成員の多くが貧窮農民であつたとしても叛亂の主導者は匪徒・流氓・塩徒・胥役などの「反社會的分子」であつた。⑤かれらは人口過剰の三楚・三吳・兩粵・晉・豫の地から四川へ集中した人口移動に伴なつてこの山地に集結し教團に加入したものである。⑥かれらは下部階層が人口増加による「人口法則的貧困化」・消費生活の膨脹による浪費・破産の結果・「基礎社會」・「農業生産關係」から析出分離されたもの、つまり當時全國的に發展した社會的矛盾の産物である。⑦ところどころの矛盾と階級分化を促進した壓力は、人口對田土・職業および收入對支出の關係の數學的不均衡つまり「比較的純粹に經濟的な關係」であつて、地主・商人勢力による「封建的支配關係」・「經濟外的強制」の關係ではない。人口増加の根本原因は日本の幕藩体制下の如き嚴しい「封建的桎梏」を欠いた點にあり、地主・商人の土地兼併・地方官の誅求も通常の經濟的因果關係よりするものである。⑧右の矛盾は三藩・台灣の亂平定後の農業生産力・商業・貨幣取引の發達過程の間に生じ乾隆期に至つて表面化した。⑨かゝる社會經濟の發達を規定する特殊かつ重要な要素としてこの期における對外關係を考察せねばならない。

◇以上の諸點は私見では本書の論理構成上重要なものと思われ——かゝるとりあげ方は著者にとつては不本意かつ迷惑であるかもしれない——教えられるところはまことに大きい。

たゞこれらは一面問題の解決點でもあるが、他面ではあらたな問

題提起の諸點をなすものであらう。

しかし私見をのべるまゝに、ここで紹介者としての義務をはたさなければならぬ。本書が論述する所はきわめて多く、少い紙面では消化しきれないが、幸い序章において著者自身によつて所論の全体にわたつて總括がなされている。以下主としてこれにもとづいて粗略ながら概要を傳えたい。章・節・頁の指示は省略した。

◇内政とそれによつて重大な影響をうける社會經濟的諸關係に對する對外關係の規定◇著者は、輝かしい清代中期史を規定する重要な契機として、次の二つの對外關係を指摘する。第一は一八世紀中葉におけるズンガル部を中核とするエリート蒙古に對する清朝の勝利がもたらした北邊の軍事的安定、第二は同じ頃より後の對英貿易を基軸とする對西洋關係の發展である。ハルハヤチベットをめぐるカルク國家との戰爭、グルカ族に對するネパール遠征など北邊に對する政治・軍事的記述、あるいは茶—銀貿易の發展に伴なう英清關係や双方の貿易政策—廣東一港主義・公行制度、東印度會社の獨占・自由貿易論・マカートニール英使の來清など—の展開に關する交渉史的記述は、相當な分量を占めているが、ここでは立入らずに先を急いで、その規定關係をみれば、

①北族の壓力の消滅↓清朝の軍事的財政的負擔の著減↓國庫存貯銀兩の著増↓大規模な租稅減免・災害救助↓農民層の租稅負擔の輕減↓農村社會の安定・農業生産力の擴大、②對西洋貿易の發達↓銀の巨額の流入↓内國商業の發展・商業資本の蓄積・(宮廷・官僚・獨占商人の致富)、となつてゐる。

◇社會問題——人口過剰と反社會分子の析出◇社會的經濟的諸關係の發達は一方においてその矛盾の要素を創出し發達させた。人口法則的貧困化・社會階層間の土地所有をめぐる對立・奢侈濫費による破産は結局社會階層の下部に強く作用して、それを「社會秩序」より離脱させ下の方から社會を崩壊に導いた。かくて、社會秩序から離脱し社會秩序を侵害しつゝその生存を維持することにより再び社會崩壊作用を推進するという「反社會分子」——著者の叛亂觀を決定する重要概念で具体的には流氓・流乞・流氓・土匪・地棍・博徒・訟師・遊手無賴・私鑄・私塩の徒・惡習胥役などを指す——が成立した。一方清朝政府は減稅・勸農・開墾など對策を講じたが、人口増殖・上下の對立の進行を根本的に矯正することは、儒教的理念・權力の基盤を否定することになるので、不可能であつた。

◇矛盾の集中的表現としての三省交界山地における人口集中・階級的對立◇清朝は兵亂で荒廢した四川盆地に對し康熙中葉から移民開墾政策をとつたので周邊やがては長江・珠江流域の過剰人口が集中し雍正以降限度を超したが流氓の集中を阻止しえなかつた。しかも後來の流移者は多く貧民であるが、肥沃な盆地はすでに初期の有産移民に占められ、やむなく地方乏しく土匪横行する山地に増集した。土著民・早期移民・後期移民の間には七重八重の小作關係が生じ紛争の因をなし、また地價ははじめの十倍に昂騰した。一方川東・川北の塩場にあつては塩商と私販小民との間に對立抗争あり、陝西山北では漢中・西安の富商が製材・製紙業を經營したが、山内の米價が昂騰すると場を閉じて山中の勞働者を解雇した。四川の長江筋では水夫の失業月に一萬を數え、かくて窮民が隊をなして富戸に食を強制する「喫大户」の如き習さえ生じた。世界の變革を願う氣分が

みなぎるのは自然であり、各種宗教結社存立の基礎もそこにあつた。◇亂の發端と經過◇乾隆末年に及んで急速に勢力を擴張した白蓮教は、本來個人的現世的福利を希求する結社であつたが、その呪卜的性格の故に教首の宣傳と官憲の壓迫により、反社會分子（咽喉の如き）を吸収して軍事的革命的結社へと轉化した。官憲の檢擧とそれに藉口する誅求とが起亂の直接動機となつた（官逼民反）。教徒を官に告發した郷紳が基督教徒であつたのは興味深い。亂は嘉慶元年正月湖北西南隅に發し西北部・四川東部へ擴大した。各軍事據點が擊破されると教軍は河南・陝西を経て翌年六月四川に入り友軍と合流山中にゲリラ戰を展開した。四年嘉慶帝親政以來、軍紀肅正・保寨築造・隨征鄉勇の募集・復員鄉勇による村落自衛・招撫などの諸對策が進み、六年夏頃から奏功をみせたが、八・九年には鄉勇の癡返りなどで苦戦し、平定をみたのは漸く十年春であつた。

◇亂の性格と歴史的意義◇農民暴動とは支配層の被支配農民層に對する壓迫が極限に達したとき農民が組織的に武力反抗するものとする著者は、さらに叛亂が社會經濟的政治諸矛盾を解決し新秩序を創出する可能性をもつかいなかという觀點から、革命論・農民暴動論を否定する。まず、嘉慶教亂は大体において貧窮農民層を基盤としているが、その起因は官の一般農民に對する壓迫ではなく、宗教團體としての教團に對する彈壓である。一般庶民はやむにやまれぬ宗教的欲求から抗官行動に出たとし、宗教的要素は份裝にすぎぬという佐野氏の農民暴動説を斥けた。

また「反社會分子」が主導權をにぎつたので農民運動的色彩が減殺され單なる反社會的掠奪行爲たる傾向を強めたという。戰鬪形態からみれば、教軍内の反社會分子對官憲・鄉勇内の反社會分子の

「横の相剋的友喰運動」に墮し上下の階級闘争性を欠除したともいわれる。さらには、個人的現世利益が主目的で、未来への志向・民衆による革命を示す彌勒下生信仰は抗官氣運が生じた後からのむしろ従たるものに止まり、しかもあなたまかせの宿命觀「劫」意識が強い教義の點で、獨裁君主制・官僚制に對する理論的否定を綱領にもたない點で、また宗教的權威による組織の非民主性・專制性の點で、行動の主体性・合理性・革命性を欠いたと批評された。一方清朝が、軍費一億二千万兩を費消し以後財政の窮迫になやみ、また八旗・綠營の無力が曝露し、鄉勇制依存のやむなきにいたつたこと、隨征鄉勇（反社會分子）を戦後綠營に編入して綠營制崩壞の端を開いたことは、その軍事史財政史上に一大轉機を來した。嘉慶教亂は清朝命運盛衰の分水嶺をなしたわけである。

◇以上が本書の概要である。最後に一言私見をのべれば、「基礎社會」「農業生産關係」に關する著者の見解が明白でないことが、對外的要素の對内規定・人口法則・封建的桎梏の欠除等々の歴史的特殊の意味づけを讀者に困難ならしめてはいまいか。「地主・商人的利害に立つ清朝國家」とは右の基礎社會とどんな關係があるだろうか。何時何處をとわず常にそうあるという非歴史的解释は正に著者が斥けられた所である。上記の事項も特定の「農業生産關係」との關連の上ではじめて具體的意味をもつと思ふ。さらに叛亂の性格判定の條件も少しばかり超歴史的・形式的ではなからうか。採點も辛すぎて、この分では中國史上の農民暴動候補は大方落第しそうである。階級闘争もその時々社會・國家のワクの中で評價すべきではないだろうか。この亂が農民暴動でないにしてもあるにしても、以

上の關係の説明を経た上での結論であつてほしかつた。「反社會分子」も「社會秩序」から全く除外されている點に問題があるらう。

(笹本重巳)

〔追記〕 願れば以上は素人印象記にすぎない。「批評」の方は別に適當な人があるはずだから、ここでは著者の見解とくに論理をなるべく忠實に「紹介」したいと思つた。しかし、紹介だけにしても、著者の諸論文にも眼を通して一步でも著者に接近するのが義務であると考えたが、編集の都合で時間的に果せなかつた。著者および一般に對して、例の査言としてではなしに、お詫びする。また、「紹介」欄待遇改善をのぞむ次第である。

次に本書卷末の目錄そのほかによつて、著者の關係論文を一一とり列挙しておく。

★宋代佛教結社の研究——元代以後の所謂白蓮教匪との關係より見て、史學雜誌、五二一・二・三。

★羅教について——清代支那宗教結社の一例、東洋文化研究所紀要、一。

★清代に於ける宗教的叛亂の性格、東洋文化研究、九。

★清朝の儉約令とその政策的意義、オリエンタリカ、一。

★近代中國に於ける人口論について、愛知大學文學論叢、一。

★阿片戰爭當時に於ける清朝とネパール及び英印との關係、同前、三。

★清とグルカ及び英領印度との關係、東洋學報、三二一。